

阿久遺跡 (第7次発掘調査)

平成5年度範囲確認調査報告書

歴史文化研究センター

9075

中央自動車道沿道跡西ノ宮線

1994.3

長野県原村教育委員会



序

このたび阿久遺跡範囲確認調査報告書を刊行することとなりました。

阿久遺跡は、住民の熱意と関係者各位のご協力により、昭和54年7月2日に国の史跡に指定され、全国的にみても例のない大規模かつ貴重な縄文時代の遺跡が、永く保存されることになりました。その後、村としては国・県の補助金を受け指定地の公有化を進めてまいりました。

貴重な文化遺産を大切にするとともに、後世に伝えていく責任を強く感じるものであります。このたびの調査成果を、阿久遺跡の保護・活用に役立てていきたいと思っておりますが、何分まだその緒についたばかりであります。今後関係者のお力添えを今まで以上にいただく中で、より良い史跡整備事業を実施していきたいと思っております。

発掘にあたり、県教育委員会の御指導ならびに発掘にかかわる多くの皆様の御協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

また、発掘報告書刊行に至る過程において、お世話いただいた関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例 言

- 1 本報告は、長野県諏訪郡原村柏木に所在する阿久遺跡の第7次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成5年12月10日から20日にかけて実施した。整理作業は、平成6年2月1日から3月20日まで行なった。
- 3 現場における記録と写真撮影は平出一治・平林とし美、図面の作図とトレースは平林、執筆は武藤雄六・平出・平林が話し合いのもとに行なった。
- 4 本調査の出土遺物・記録等はすべて原村教育委員会で保管している。なお、本調査関係の資料には、11の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、長野県教育委員会文化課の丸山敏一郎・小池幸夫・小平和夫の諸氏をはじめ多くの方から御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

序	
例 言	
目 次	
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の経過	2
3 発掘組織	2
4 遺跡の位置と環境	3
5 調査の方法	8
6 土 層	12
7 遺 物	12
8 ま と め	14

1 発掘調査に至る経過

阿久遺跡は、中央自動車道建設に先だって発掘調査されたが、調査が進行するにしたがい、「縄文時代観の転換」とまでいわれたように、遺跡の重要性があきらかになり、長野県考古学会を中心に保存運動がもちあがった。村民からも保存の声が聞かれるようになり、昭和54年7月2日に55,940.97㎡が国の史跡に指定された。

指定当時は、この付近一帯の開発はまだまだ考えられない状況であった。月日のたつのは早いもので十数年の歳月が流れ、ここ数年間のほんの短い期間のことであるが、阿久遺跡を取り巻く環境が急激に変わろうとしている。その大きな一つは、遺跡の西側に隣接する地域に「県営茅野市金沢工業団地」が造成されたことである。造成に先立つ発掘調査では、縄文時代前期前半の木造構造物（方形柱穴列）をもつ大環状集落跡が発見され、阿久遺跡との関係および重要性が注目され、保存問題が浮上したことはまだ記憶に新しい。また、養護施設の建設、圃場整備、河川整備、道路整備事業等々の開発および計画は後をたたない。しかし、それを止める手立ては未だみあたらない。

そんな状況の中にあって、平成2年12月に長野県考古学会から「八ヶ岳西南麓における「広域農業圃場基盤整備事業」に係る自然環境及び遺跡群の保護保存についての要望書」、同5年7月



調査地区全景

に「再び八ヶ岳西南麓における自然環境及び遺跡群の保護保存についての要望書」を頂くにいたった。しかし、圃場整備事業計画は進むばかりである。

阿久遺跡の保存運動において、遺跡はもちろんであるが、それを取り巻く景観保存の必要性が訴えられていたように記憶している。景観を考慮した保存をしていきたいが、地元住民の強い要望により、阿久遺跡を取り巻く広範囲は「県営圃場整備事業原村西部地区」として、平成6年度から事業が施工されることになった。事業は阿久遺跡南の阿久川と北の大早川の河川整備も含まれていることもあり、竣工後の姿は思いもおよばない変わりようが予想される。阿久遺跡の水場の保存はぜひとも必要であり、遺跡が残っても、人が生活していく上で最も必要とした水場が保存できなくては、その意義は半減してしまっただろう。

村教育委員会ではより広い範囲の保存を考え、国庫と県費から補助金交付をうけ、平成5年12月10日～20日にかけて遺跡範囲確認調査を実施し、その成果を保護に役立てていくこととする。

2 発掘調査の経過

平成5年12月10日 発掘調査準備をはじめめる。

13日 小さな立ち木および下枝の片付けを行い、グリッドを設定する。山林であることからグリッドは思う箇所に設定できない。

15日 調査団長挨拶のあと、グリッド発掘をはじめめる。

16日 グリッド発掘を行う。

17日 グリッド発掘。調査の終了したグリッドから埋戻しをはじめ、グリッド杭の撤去、片付けをはじめめる。

20日 片付け、機材の水洗いをを行い調査は終了する。

3 発掘組織

阿久遺跡第7次発掘調査団名簿

団 長 武藤雄六

調 査 員 宮坂光昭 平出一治 平林とし美

調査参加者 発掘 清水豊一 清水太助 中村きみ及 小林ミサ 津金喜美子 (順不同)

整理 鎌倉あき子

事 務 局 原村教育委員会事務局 平林太尾 (教育長) 平林今朝二 (教育次長)

4 遺跡の位置と環境

阿久遺跡(原村遺跡番号11)は、八ヶ岳西麓の長野県諏訪郡原村柏木区の南西方約500mに位置している。東の八ヶ岳から流下する阿久川と大早川という2本の小河川(宮川の支流)によって南と北を浸食された東西に細長い尾根上から緩やかな南斜面に立地している。南の阿久川側は比較的なだらかな傾斜であるのに対し、北の大早川側はきつい斜面となる。その地形からみて、縄文の人たちは阿久川を水場としていたものと思われる。

尾根幅は広く、遺跡が立地する部分の平坦面は250mを計り、当地方における尾根の中では最大級である。これより西は二つに分れるが、南側が阿久尻遺跡(茅野市)である。阿久尻遺跡の先端にあたる約1km先で、フォッサマグナの西縁である糸魚川—静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られている。東はいったん痩せ尾根となって再び広がりを見せる。地目は、山林・普通畑および中央自動車道である。中央自動車道が建設されるまでは、落葉松、松、サクラ、雑木などの山林であった上に、黒色土の堆積は極めて厚く、後世の擾乱を受けていない非常に良好な状態であった。なお、標高は898—906mで、本調査地点は905m前後を測る。

八ヶ岳西南麓一帯には東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられ、原村は富士見町の井戸尻遺跡群と茅野市の尖石遺跡群のほぼ中間に位置し、尾根上には、縄文時代を中心とした遺跡が数多く埋蔵されている。遺跡の高度限界は、第1図に示したように標高1,200m前後のラインである。

ここ阿久遺跡の周辺にも大小様々な遺跡が分布している。それは第2図および表1に示したように極めて密度が高い地域である。なお、遺跡分布図および一覧表に表示した番号は原村の遺跡番号であり、阿久尻遺跡は茅野市であるため「A」と表示した。

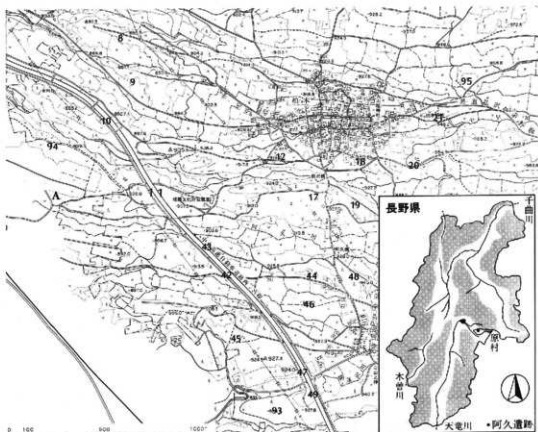
発掘調査は、中央自動車道の建設に先立って、県教育委員会が昭和50年度から4か年を費やして実施している。昭和50年度に行なわれた第1次調査は、まだ塩水遺跡と呼称していた頃で、遺



第1図 原村城の地形断面模式図(赤岳—阿久—宮川ライン)

跡の範囲確認調査である。同51年度から行なわれた第2～4次調査が進むにつれ、従来の考古学上の知見をこえた諸遺構の発見が相ついだ。それは大規模な環状集石群の露呈と、その下層から発見された関山式併行期の馬蹄形集落跡・方形柱列群・立石と列石群である。発見されたこれらの遺構は、縄文時代前期の社会構造が理解できる資料であり、その重要性が認識され「縄文時代観の転換」とまでいわれた。

しかし、その時はすでに中央道の工事は遺跡の前後まで完成しつつあったが、県考古学会が中心になった保存運動が持ち上がり、それは、全国的な規模となる一方、地元では市民運動に大きく発展していった。その結果、遺跡保存か、中央道の早期開通かで、国会・県会でも取り上げられた。最終的には保存を前提とした調査を十分に実施するとともに、中央自動車道をはじめ関連する農道の工事を大幅に計画変更をしたうえで、遺構は埋め戻されその保護を十分に講じて、道路の下に埋没保存することとなった。さらに昭和54年度に村教育委員会は「重要遺跡範囲確認調査（第5次）」を実施し、遺跡の範囲を確定したうえで、第3図に示したように、中央自動車道の下を含めた55,940.97㎡が国の史跡に指定され、同54年度から公有化が進められ今日に至っている。



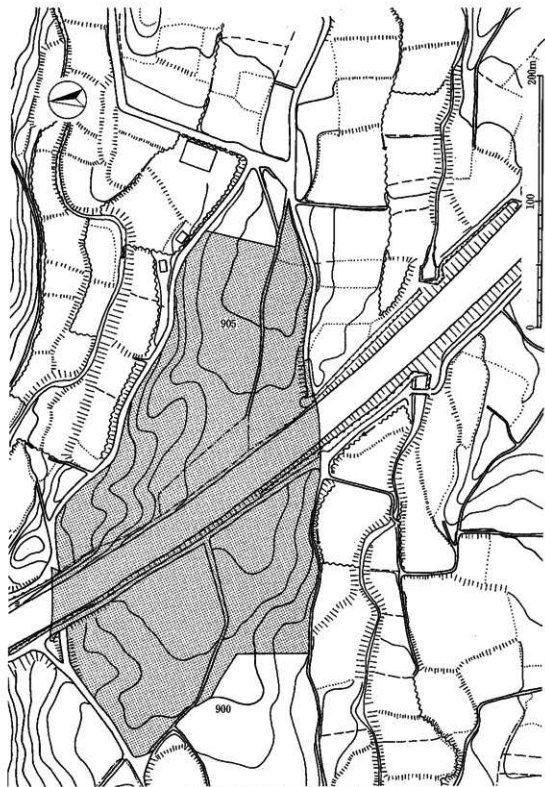
第2図 阿久遺跡の位置と付近の遺跡 (1:20,000)

本遺跡は上・下2層の遺構群からなる。上層は縄文時代前期後半の祭場と思われる遺構群、下層は前期前半の中央広場に木造構造物（方形柱穴列）をもつ環状集落跡からなるものである。なお、上・下2層の間には短期間の断絶が認められる。祭場とされている上層の遺構群は立石と列石を中核として、外側に向かって土壌群、集石群、住居群が同心円状に見られるもので、特に準大の川原石が200個から500個集められた集石300基以上からなる環状集石群の規模は径120mにおよび、使用されている礫は10万個以上に達することが推定されている。また、土壌群の中には小立石の見られるものもあり墓地である可能性が強い。

本遺跡は断絶期はあるものの、ほぼ縄文時代前期を通しての生活の場であり、居住域から祭場へと変遷していった過程と、前期の墓制や祭式など、社会・精神構造を知ることができる遺跡として、全国的にみても例がないようである。

表1 阿久遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
8	比丘尼原北			○	○						○			
9	比丘尼原					○					○			
10	柏木南	○			○	○					○		昭和51年度発掘	
11	阿久		○	○	○	○	○				○		国史跡 昭和50～53年度発掘	
12	前沢					○					○		昭和55・61年度発掘	
17	白ヶ原			○		○					○		昭和53年度発掘	
18	前尾根西					○							昭和51年一部破壊	
19	南平					○								
20	前尾根					○	○				○		昭和44・52・59年度発掘	
21	上层沢尾根					○	○					○	平成4年度発掘	
42	居沢尾根					○	○				○		昭和50～52・56年度発掘	
43	中阿久					○						○	昭和51年度発掘	
44	原山					○					○		昭和50年一部破壊	
45	広原日向	○				○	○				○		昭和58年度発掘	
46	宿尻					○					○			
47	ヲシキ			○	○	○					○		昭和51年度発掘	
48	楡の木					○							昭和53年一部破壊	
49	大石	○		○	○	○					○	○	昭和50・平成4・5年度発掘	
93	大石西				○	○					○		平成3年度発掘	
94	下原山茂佐久保					○							平成2・3年度発掘	
95	土井平										○		平成4年度発掘	
A	阿久尻		○	○	○						○		茅野市 平成2・3年度発掘	



第3圖 国史跡範圍圖 (1:3,000)



集石群の一部

(中央道用地内調査)



阿久江期遺構群

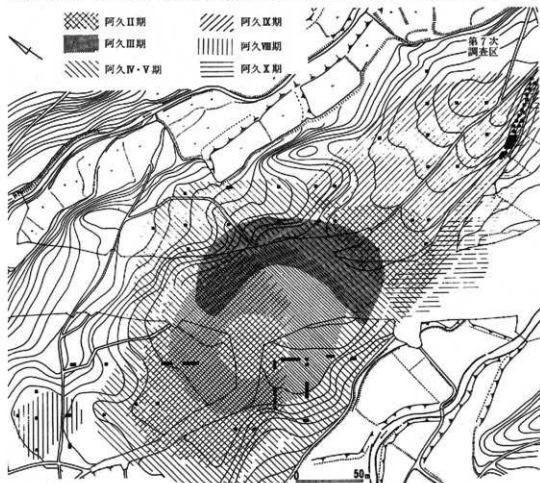
(中央道用地内調査)

5 調査の方法

調査は、遺跡東側の範囲確認を目的にしたことからグリッド発掘と表面採集を併用して行なった。

表面採集は、第5図に示したように阿久尾根の南と東側の畑地で行ない。発掘は、調査に先だち2×2mのグリッドをあらかじめ設定して行なったが、地目が山林であるため、立ち木に左右された面が大きく、また、調査の目的を埋没する遺構の確認よりも、遺物の散布範囲の確認に重点をおいたこともあり、調査グリッドの間隔はまばらな上にその数はそれほど多くない。

なお、設定したグリッドの東西方向には50mの大地区を設け、西からA地区・B地区というようにアルファベットを用いた地区割りをした。大地区の中をさらに2×2mのグリッド（小地



第4図 時期別遺構・遺物分布概念図
(■第5・第6次発掘調査グリッド)



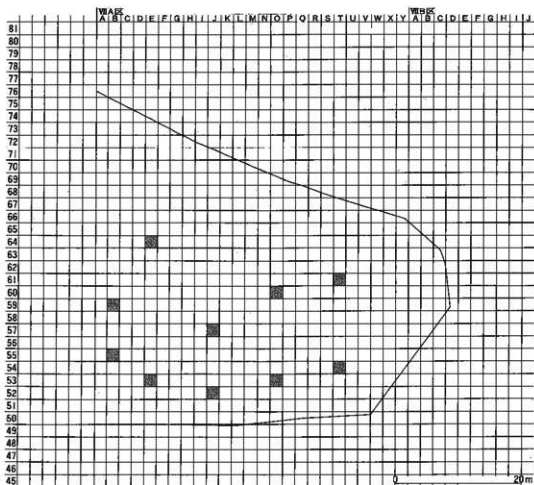
第5图 调查区域图·地形图 (1:3,000)

区)に分割し、東西方向は西からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をより北にいくにしたがい大きくなる。

個々のグリッドの呼びかたは、第6図右上の発掘グリッドでみると、東西方向の大地区はA地区であり、小地区の東西方向はTラインにあたることから、大地区・小地区を並べた「AT」となる、南北方向は61ラインで、それは「AT-61」となるが、本調査を便宜上第7次発掘調査と呼んだことから、「AT-61」の前に第7次発掘調査を示す「VII」を表記した「VIIAT-61」となる。

グリッド発掘は、ソフトローム層の上面まで行い、発見した遺物はグリッド別、層位別に取り上げた。

調査の結果、縄文時代中期と後期の土器破片と石器、平安時代の土師器・須恵器の破片と石製品を僅かに発見した。



第6図 阿久遺跡グリッド配置図 (1:600)

発掘風景



グリッド発掘状態



埋め戻し風景



6 土 層

第6図のグリッド配置図に示したように、10グリッド40m²の平面発掘を実施したが、出土遺物は少なく、遺構を検出するまでに至らなかった。

ソフトローム層までの深さは、グリッドによって違いがみられたが43～81cmである。

本遺跡の層序については、VII A E—53グリッド北壁のおおまかな観察結果を記しておきたい。

第I層 黒褐色土層 表土層・林の腐食土で13cmを計る。

第II層 黒色土層 20cmを計り、第I層よりしまっている。

第III層 黒褐色土層 21cmを計り、縄文時代の遺物は本層から出土した。

第IV層 ローム漸移層

第V層 ローム層 ソフトローム層でこの上面までの調査である。

7 遺 物

発掘調査の結果、縄文時代と平安時代の遺物を発見した。これらの遺物を時代別に分類し若干の考察を加えてみたい。

(1) 縄文時代の遺物

発見した遺物は土器と石器がある。

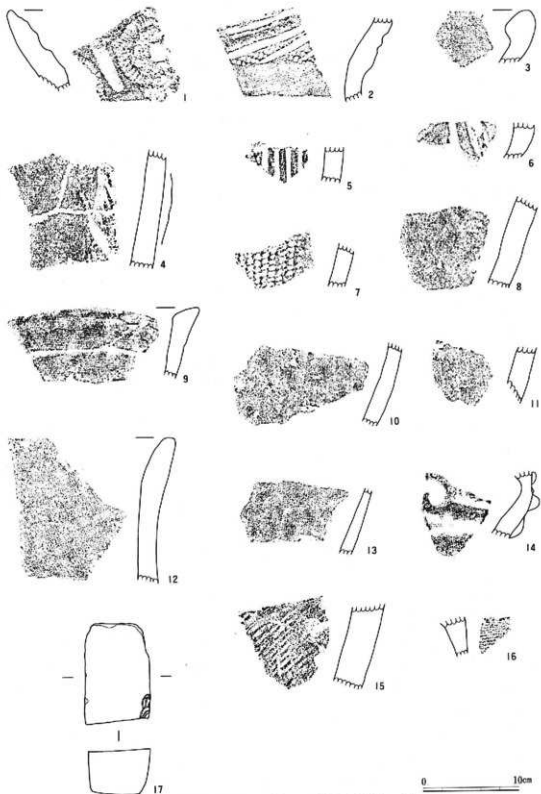
土 器

土器は破片ばかり40点あり中期と後期のものがある。胎土・整形・焼成は普通であるが、器形が判別できるものは少ない。小破片ばかりであるが14点図示した。

第7図1・2は中期初頭の九兵衛尾根式で、1は浅鉢の口縁部破片。3～7は中葉の井戸尻式で、8～12は末葉の曾利式である。

13・14は後期土器である。

これらの土器を時期別にみると、その数は少なくそれぞれの性格を述べることはできないが、井戸尻期の住居址が村道改良に伴って昭和52年度に実施した発掘調査で1軒(101号)発見されているし、曾利期の住居址も中央道建設に伴う発掘調査でやはり1軒(10号)発見されているので、この時期の集落が埋没していることは容易に考えられよう。



第7图 阿久遺跡出土土器拓影と石製品実測図 (1:2)

石 器

発見した石器は少ない。

図示していないが、水成岩の剥片、黒曜石の剥片が各2点、輝石安山岩製の磨石2点を発見しただけである。磨石は土器の出土状況からみて中期の所産であろう。

(2) 平安時代の遺物

発見した遺物は土器と石製品がある。

土 器

小破片ばかりであったが、土師器と須恵器がある。第7図15は須恵器の大甕胴部破片、16は土師器の甕胴部破片である。

石 製 品

第7図17は砥石の半欠品で泥岩製である。伴出遺物がないため明確な帰属時期を示すことはできないが、本調査地区の南隣で、昭和52年度に村道改良工事に先だって実施した発掘調査における平安時代の遺物出土状態を考慮して考えると、本資料は平安時代となろう。

8 ま と め

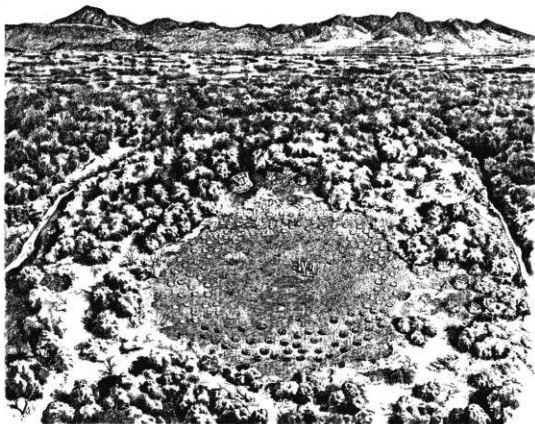
表面採集では緩やかな尾根南斜面で、縄文時代中期と平安時代の土器破片を、東側では後期の土器破片を採集している。グリッド発掘でもやはり縄文時代中期と平安時代の資料を発見したが、縄文時代・平安時代とも資料は少ない。遺物の散布状況からみて、調査した地域は縄文時代中期と平安時代が複合していることがわかった。

阿久遺跡については「4 遺跡の位置と環境」で長々と述べたが、本調査では縄文時代中期と平安時代の資料が発見され、同じ阿久遺跡でありながら中央道の下に埋没保存した前期の大集落・祭祀場とはその時期は違うものであった。これは昭和52年度に実施した第6次発掘調査で中期の住居址を発見しているし、第5次調査においては中央道から東側で数多い中期の土器破片を発見している。したがって、今回調査した地点から中央道までの広い範囲に、中期の集落跡が埋没していることは容易に想像できることである。しかし、今までの発掘では前期と中期の集落が重複する傾向はあまりみられなかった。中央道建設に先立つ発掘調査では中期の住居址は1軒発見されただけである。それは前期の集落を避けたように思える位置からの発見であった。

そこで、当地方における中期集落に目を向けてみると、その多くの居住地は尾根幅が最も広い

辺りを占有しているのが普通であり、ただ単に阿久尾根を中期の集落跡として想定すると、その占有地がやや異なっているように思う。

調査の結果では、占有地として最良と思われる領域を避けた東側に集落が寄っていることが想定できた。これは、縄文時代前期の大祭祀場が中期になっても地表面に露出していたか、あるいはその場ないしは精神が受け継がれていたようにも考えることができよう。我田引水的な考えとなってしまったが、前期後半期の祭祀の精神ないしはその場が延々と中期まで受け継がれてきた遺跡であり、八ヶ岳山麓に発達した前期から中期の縄文文化を解明して行く上で、極めて重要な遺跡であり、本調査地点は、阿久遺跡の性格解明に欠くことのできないところである。



第8図 阿久ムラ遺像図（前期諸磯期後半）

原村の埋蔵文化財26

阿久遺跡 (第7次発掘調査)

平成5年度範囲確認調査報告書

発行日 平成6年3月20日

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 日本ハイコム株式会社
長野県塩尻市大字北小野4724
電話 0263-56-2111

